

特集 弘前大学図書館

今回の特集は、現在も附属図書館をよく利用されている名誉教授の栗原先生（教育学部）と本瀬先生（理工学部）から原稿を頂きました。

附属図書館とわたし

弘前大学名誉教授 栗原 靖

弘前大学に赴任する以前に、わたしが持っていた津軽のイメージは、無論、太宰治の津軽でした。しかし、実は太宰はおなか一杯といったところもあります。わたしの場合、時間的には北畠八穂の津軽の方が先でした。戦後まもなく、昭和21年の秋、少年少女雑誌『銀河』の創刊号に「12歳の半年」が載りました。注目していたところ、翌年から「ジロー・ブーチン日記」の連載が始まり、それがわたしの津軽の原型になりました。そういうこともあって、これが載っている『銀河』を探しましたが、附属図書館には、残念ながらありませんでした。とてもいい雑誌なのですが、この雑誌を所有している図書館は意外に少ないようで、国立大学法人では奈良女子大学と大阪教育大学だけです。今では、『北畠八穂児童文学全集』などでもこれは読めます。だがそれもここにはないようです。青森出身の作家なのに、弘前大学、北畠八穂に対して少し冷たいのではないかと思ったりもします。

大学の図書館というのは当然のことですが、その大学の歴史に左右されます。青森師範、旧制弘前高校由来の、時代を感じさせてくれる書物を開いて見るのがわたしは好きです。その内容はわたしの理解を超えています。林鶴一の『数学叢書』とか、辻村太郎の『日本地形誌』とか、高田保馬の『社会と階級』、『洛北集』とか、開いて見ると大正の終わり、あるいは昭和の始めの「におい」がします。南日恒太郎の『和文英訳法』（増訂版）があつたりします。子どもの頃の記憶の中の本棚では、その隣に河上肇の『貧乏物語』がありました。で、ここにもあるだろうと探してみたのですが、この図書館にはないようです（戦後の岩波文庫版は無論あります）。弘前高校（旧制）が誕生する前にこれは絶版になっていたのかも知れません。

安岡章太郎の『流離譚』によって天誅組の話を知りました。そのスポークスマンだった伴林光平の全集がここにあることを書庫で偶然発見しました（佐々木信綱編、昭和19年）。実はこの全集、なにもめずらしいものではなく、CiNii(サイニィ)で調べたところでは、一部の例外を除いて、ほぼすべての国立大学法人の附属図書館にあります。今では理解しがたいですが、戦争末期の気分に応えるものがこの人にはあったということでしょうか。実はかれの全集、もうひとつあつて（小野利教編、1925年）、こちらの方を持っている図書館はご当地の奈良とか、大阪近辺の大学は例外として、他にはあまりないようです。時勢の変化に対応しているものと思われまふ。図書館はそういうことを実感させてくれる場所でもあるようです。

わたしの専攻は、資料をあつめて、これを分析し、結論を出すような類のものではなかったもので、そういう意味で附属図書館を利用したことは実はあまりありません。だが、大学の図書館、わたしは結構好きです。何かあるとわたしは図書館の書庫に入り込んで遊んでいました。こっそり蔵に入り込んで親のラブレターを見つけるような、あるいは、野の道を散歩していてワルナスビの花を見つけるにも似た発見の宝庫としての面白さが図書館にはあります。客観的には「それがどうした」としかいいようがないものでも個人的には面白かったりします。図書館本来の役割ではないのかもしれませんが、課題を持って文献を検索するという利用の仕方とは別に書棚のある空間そのものを楽しむという利用の仕方もあるのではないかと思ったりもします。

（くりはら おさむ）

図書館生活

弘前大学名誉教授 本瀬 香



定年後丸7年になります。その間論文3報と1冊の本を書きました。ほぼ毎日、運動をかねて大学図書館か市立図書館へ通っています。「少年老い易く学成り難し、されど、老人は1日にして成らず」と弁解している毎日です。

主に自分の勉強ですが、大学図書館ではもっぱら数学の本と新聞です。小野孝先生の数論序説を読んでいて、思いついた結果が3番目の論文になりました。数学の論文を書く場合は殆ど英語です。日本語で書かれた論文は、国内大学紀要か、日本数学会の雑誌「数学」位でしょうか。この本を引用するにあたって無論、書名の後に(in Japanese)として引用すれば良いのですが、英訳本がないか探したところ大学にありました。それも著者の英訳本、見つけたとき非常に幸せな気分でした。また、E. Artin の講義録 Theory of algebraic numbers(ドイツ語の英訳)が弘前大学にあるとは思っても見ませんでした。現役時代も大学の図書館に時々行っていましたが、教室の図書でほぼ間に合っていました。上記のことは私にとって以外な発見となりました。この2冊を配備した方と図書館に感謝です。

市立図書館では、絵本、小中学生用に書かれた本、新聞、数学の本などを見ます。これらの本には教えられることが多いです。中でも、環境問題に関心のある私には、写真集「南極がこわれる 藤原幸一著、ポプラ社、2006」に驚き、著者の努力に感服しました。高円宮妃 久子殿下の「序文にかえて」の文も簡潔で要を得た文章だと思いました。

大学図書館は現在、改修工事中です。改修前の図書館で、私が最も不満だったのは1階に事務室、館長室があり、2階にメインカウンター、閲覧室があったことです。1階に閲覧室があるのが望ましい。利用者のことを最優先に設計されるのがよ

いと思います。私が弘前大に来たときは、2階利用者入口への外の階段は屋根がなく冬は雪が積もっていました。しばらくして、屋根が付きましたが、吹きさらしなので、強風、大雨、吹雪のときは難儀です。今まで事故がなくて幸いでした。定年間近のころ、和歌山大学の図書館を利用させてもらいました。お城の近くにあった和歌山大学は、山の上へ移転しました。私の友人に聞いたところによれば、交通の便が悪い代わりに、図書館に最も力を入れ、建設したとの話でした。私は国内外を問わず多くの図書館を見せてもらいましたが、当時の私には和歌山大学図書館が1番でした。

すこし話は変わりますが、陽気のよい日には、時々、市立図書館から、食事や散歩にでかけます。弘前公園、植物園が散歩地で、たまにはベンチに腰掛けて勉強もします。

私の70才の誕生日の2011年12月26日、弘前公園の「二の丸大シダレ」が根元から倒れました。偶然とはいえ不思議な縁を感じ、私にとって重い出来事でした。樹木医諸氏の尽力で、何とか持ちこたえ、翌年の春に、他の桜に比べて見る影もないが、なんとか花をつけた。私が赴任した1985年の春の夜桜見物では、着物を着た美人がこのしだれ桜をバックに写真を撮っていました。美人もさることながら、その時のこの桜はすばらしく美しく感じました。今でも、目をとじればはっきりとその情景が浮かびます。今年2014年も花は少ないがきれいな花を咲かせていました。1914年にこの桜は宮城県人会から寄付されたうちの1本で、移植から今年で100年、勇気づけられました。

最後になりましたが、元図書館長の松原邦明先生が去年2013年12月19日にお亡くなりになりました。先生は豊泉の名づけ親(豊泉創刊号 参照)でした。心からご冥福をお祈りいたします。

(もとせ かおる)